舞踊と自己実現
―一舞踊家を事例として―

神戸大学大学院　井上知子
神戸大学　柴眞理子

1　研究目的と方法

本研究は，舞踊家木村百合子の舞踊活動を軸に，舞踊を通しての自己実現の一つの姿に接近し，明らかにしようとするものである。具体的には，木村へのインタビューと木村に関する文献から導き出された「踊ることは生きることである」という木村の舞踊理念が，いかに形成され，体現されているのかをみていく。

2　結果と考察

2－1　舞踊家木村百合子のエピソード

次に示す２つのエピソードには，他者からの指示ではなく，自分の感性をもとに主体的に行動しようとする幼い頃からの木村の一面をみることができる。一つは，小学２年の学芸会の時，先生が振り付けた踊りを踊りやすいように変えてしまい，それを皆に教えて踊ったことである。二つは，中学の写生の時間に，赤レンガの屋根に強烈な印象を受けて，実際にはくすんだ赤であったが，それを鮮やかな赤で描き，先生に何を言われようとも変えなかったということである。

木村が高校３年の時に友人から誘われ，向坂幸子舞踊研究所へダンスの稽古を見に行ったことが本格的にダンスを始める契機となる。稽古が終わるや否や，『やりたい』[注1]という気持ちが燃え上がり入所を決意したが，稽古を始めてまもなく，月謝の代わりに子供の作品作りを担当する。そんな中で『自分が踊りたい』という一つの葛藤が木村の心に生じてくる。このことを向坂氏に相談した時に，『自分ですべてやればいい』と言われたことから，自分の踊りは自分で創る，つまり自分の道は自分で切開いていく決意を固める。

そのための一つの目標として舞踊コンクールに出場する。自分の意志を貫き通す強さと，新しいことに対するチャレンジ精神によって，舞踊作品「残んの雪」が完成した。そして，これが文部大臣奨励賞に選ばれたことから，木村は，舞踊界へ先鋭的なデビューを果たす。

このように自分でダンスを創って踊り，ひたむきにダンスに打ち込む中で，行き詰まり，一時的にダンスをやめた時期があった。そんな折，第１回フルブライトの芸術部門での舞踊参加オーディションがあり，そのステップ審査の依頼が木村にあった。そして，その時に同じ審査員であったホセ・リモンに薦められ，その次の年にフルブライトに応募し，奨学金を得て，アメリカに行く。

アメリカでは，グラーム・スクールに入ることになる。黄色人種は無視をされるという風潮があったが，積極的な行動や人とは違うことをすることによって，ひたすらトップになることを目指す。また，木村は元来，基本稽古に非常に苦痛を感じていたが，それでも稽古を続けていくうちに，『身体が舞踊のためのものに変わり，ようやく動く快感が出てきた』という。しかしその時，フルブライトの期限が切れようとしていた。そこで，『もう少し続けたい』という自らの思いによって，ロックフェラーの奨学金に切り換える。

その後，グラームのカンパニーに入団するが，ここで初めて他者からの指示によって，すなわちグラームの受身になって踊ることになる。しかし，木村が自らのことを『グラームの表現者』と言っているように，ここにおいても，あくまで自分が主体的に踊ろうとする木村の強い姿勢を垣間見ることができる。

その姿勢が具体的に表れているのが，木村の舞台に立つ時の心境である。『練習で，身体はすでに勝手に動いてくれるようになっているので，今度は心を自由に，今日の自分の心の天気を感じながら踊っていく』というのである。

そして現在，『立っているだけのダンス』，『動かないダンス』と木村自らが言うように，舞踊を通して，更に新たな自己実現に向かっている。

以上のことから，木村は常に自分の感性をもとに，ダンスを通して，常にその時々の自己の才能，能力，可能性を十分に開発し，発揮し，向上させようとする，すなわち，自己を実現してきており，今も尚，自己実現に向かっているといえる。

2－2　舞踊観，舞踊教育観

上述の木村の舞踊を通しての自己実現から，自分の踊りは自分で創り踊るという木村の舞踊観と，それを学生が実現するために支援するという舞踊教育観が培われたと考えられる。日々，心や感性を研ぎ澄まし，それが身体に反映するような心と身体の訓練を積むことによって，自分独自の動き，テクニック，ダンスが生まれてくる。これが「踊ることは生きることである」という理念の所以である。また，木村がこの理念に基づいて自己実現してきたことから，この理念は自己実現に向かった生き方そのものを表しているといえよう。

3　まとめ

全体を通してみると，「踊ることは生きることである」という木村の舞踊理念が，木村の人となりと舞踊活動を取り巻く環境から形成されているといえる。また，木村がこの理念を一環して持ち続け舞踊を通して自己実現してきており，更に今も尚，新たな自己実現に向かっていることから，この理念が体現されていると考えられる。

注1　『』は，インタビューや文献からの木村の言を表す。